

そうさく・かねば
惣作・鐘場遺跡

所在地 瀬戸市惣作町・鐘場町地内
調査理由 県道瀬戸設楽線・東海環状自動車道建設
調査期間 平成 14 年 4 月～ 12 月
調査面積 5,465 m²
担当者 藤岡幹根・酒井俊彦・成瀬友弘



調査地点 (1/2.5 万「猿投山」)

調査の経過 調査は県道瀬戸設楽線建設および東海環状自動車道建設のため愛知県建設部道路建設課および国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 12 年度より実施している。平成 12 年度は遺跡範囲の南部、平成 13 年度は南部および北辺部分の調査を行った。これまでの調査によって後期旧石器時代末から近世までの遺構・遺物が検出された。今年度は、遺跡北部と南部の調査を実施した。

立地と環境 惣作・鐘場遺跡は、瀬戸市東部、惣作町・鐘場町に所在し、矢田川支流である赤津川左岸の標高 170m 前後の 2 段よりなる洪積段丘上に立地する。遺跡は赤津川と門前川を西限及び南限とし、北側と東側は山地を北限及び東限とする。遺跡範囲の北部は大目神社の所在する山塊からのびる尾根状の段丘上に位置し、惣作川によって南部と隔てられるため遺跡は地形的に 2 つに別れる。周辺には南側に太子縄文遺跡、太子遺跡、北東部の山地部に大目神社古墳、巡間 E 窯跡、瓶子窯跡、鳳山 C 窯跡、鳳山窯跡、鳳山屋敷遺跡、鳳山 A 窯跡、赤津川上流に長谷口遺跡、八王子遺跡がある。

調査の概要 本年度の調査区は、遺跡北部の昨年度 01D 区に続く南側部分に 02A、02B 区を、南部では昨年度 01A 区北側に 02C 区、東側に 02D 区を設定した。

02A 区 昨年度 01D 区の南側に接する調査区である。式内社である大目神社からのびる尾根状の洪積台地の赤津川に面する低位段丘上に相当する。調査区北端は、大正時代以前の赤津川の旧流路である。基本層序は、現耕作土下に黒色土層を挟んで段丘の洪積層に至る。黒色土層の上面及び洪積土層上面において遺構が検出された。

主な遺構としては、古墳時代初頭の竪穴住居址 2 棟、古墳時代後期の竪穴住居址 8 棟、中世の不明遺構がある。古墳時代初頭の竪穴住居址は調査区中央やや南よりで検出され、埋土は黒色土を基本とする。竪穴住居は平面隅丸方形で、遺構に伴う構造物は不明である。出土遺物は土師器が少量検出された。古墳時代後期の竪穴住居址は調査区全体で検出され、平面隅丸方形である。粗粒砂と細礫混じりの暗灰色土を基本とし、確認できるものでは竈が北北西から北北東の辺に認められる。SB04 は検出面から床面までの掘り込みが比較的深く、やや大形の竪穴住居である。径 30cm 程の柱穴を 4 隅に検出され、柱の径は 15cm 前後である。遺構内からの出土遺物は少なく、住居の切り合いは SB07・SB08 の 1 ヶ所で単一時期に近い集落と考えられる。中世の遺構は旧赤津川河道に面する段丘縁辺部に認められる。旧河道に並行して不定形の落ち込み状の遺構が確認された。部分的に溝状になるが、性格は不明である。13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶碗) が、比較的まとまって検出された。

02B 区 02A 区に連続する南側の調査区である。北部は 02A 区と同じく低位段丘面に相当するが、中央部は上位面にあたる。南部は近世以降の耕作地造成のために南の惣作川に向かって階段状に下がり、南から 3 段目が低位段丘面にあたる。

主な遺構としては、弥生時代から中世の遺構を検出した。弥生時代後期から古墳時代初頭の時期の遺構としては竪穴住居址 6 棟、溝 1 条 (SD08) 等を検出した。竪穴住居跡は全て上位段丘面上で確認され、SB02 は段丘の縁の削平により大部分欠失する。平面形は隅丸方形でやや大形のもの (SD03・07・11) と小形のものがある。柱穴は確認できたが、SB11 以外は炉址等の構造物は検出されなかった。SB03・05・06 からは比較的まとまって土器が出土した。SB03 からは床面より浮いた状態で弥生時代後期土器・土製品が検出され、銅鐸型土製品 1 点が出土した。SD08 は、上位段丘の直下をめぐる下位段丘面上の溝で、弥生時代後期に掘削され、古墳時代初頭に埋没している。赤津川方向にのびる上位段丘の先端部分の集落を囲繞しているものと推定される。溝は、検出面より深さ約 1.2m、幅約 3.7m を測り、断面 V 字形である。溝両側面は水流による大きな凹凸があり、底部も水流により両側が削られ拡張している。底部の拡張部分の埋土は拳大以上の大きさの礫を交える粗粒砂で、上部は黒色土となる。土石流などの強い水流が流れて埋没した後掘り返しが行われている。溝下層から少量の弥生時代後期の土器が検出され、検出面に近い高さで古墳時代初頭の土器が投棄された状態で多量に出土した。古墳時代後期の遺構として調査区北端に SB01 が検出された。02A 区の集落に属するもので、床面直上より拳大以上の自然礫が多量に検出されたが、遺物は少量である。奈良時代の遺構としては、竪穴住居 2 棟が検出された。SB10 はほぼ南北方向に主軸をもち、東辺に竈を有し、床面及び竈から須恵器、土師器甕などが少量検出された。中世の遺構としては 15 世紀代の溝、土坑などが調査区北部の低位段丘面上で検出された。SD02・03 は上位段丘面直下に平行してはしり、15 世紀代の施釉陶器類が比較的まとまって出土した。いずれも検出面からの掘り込みは浅いが、SD02 は一部土坑状の掘り込みとなっている。溝の性格は不明である。調査区北端部で掘立柱建物が検出され、同部分の土坑より鉄滓や轆の羽口などが出土している。また、調査区南部の低位段丘面上で 13 世紀代の土坑が検出された。その他、SD07 から中世から近世までの陶器類が投棄された状況で検出されたが、調査区南半の階段状の削平は近世以降の時期と推定される。

02C 区 遺跡南部の 00A 区と 01A 区に間の調査区で、上位段丘面及び下位段丘面への傾斜地に位置する。基本層序として現耕作土下部が段丘の洪積層となる。

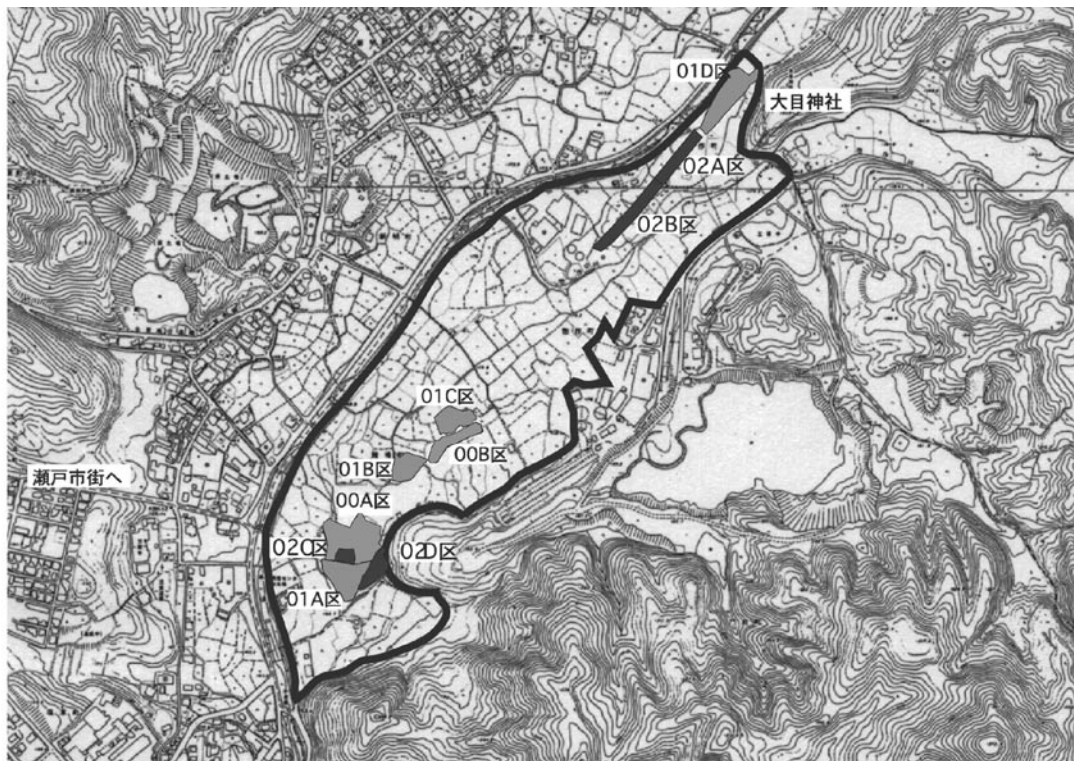
遺構は中世末の溝 1 条 (SD01) を検出する。SD01 は段丘端に平行しながら西方向に斜面をやや下る溝で、14 世紀代後半から 15 世紀前半の瀬戸窯産施釉陶器が少量検出された。また、段丘面は端部に向かってやや落ち込み、落ち込みの埋土よりこれと同時期の遺物が検出され、その他、傾斜地の包含層中からも同時期の瀬戸窯産陶器類などが出土した。

02D 区 遺跡南端に位置する調査区である。赤津川と門前川の間の段丘の門前川側に面する下位段丘面に位置する。調査区の南端は門前川の河谷である。基本層序は現耕作土下部が段丘の洪積層で、門前川河谷の端に近い部分に中世の包含層の黒褐色土層が洪積層上に存在する。

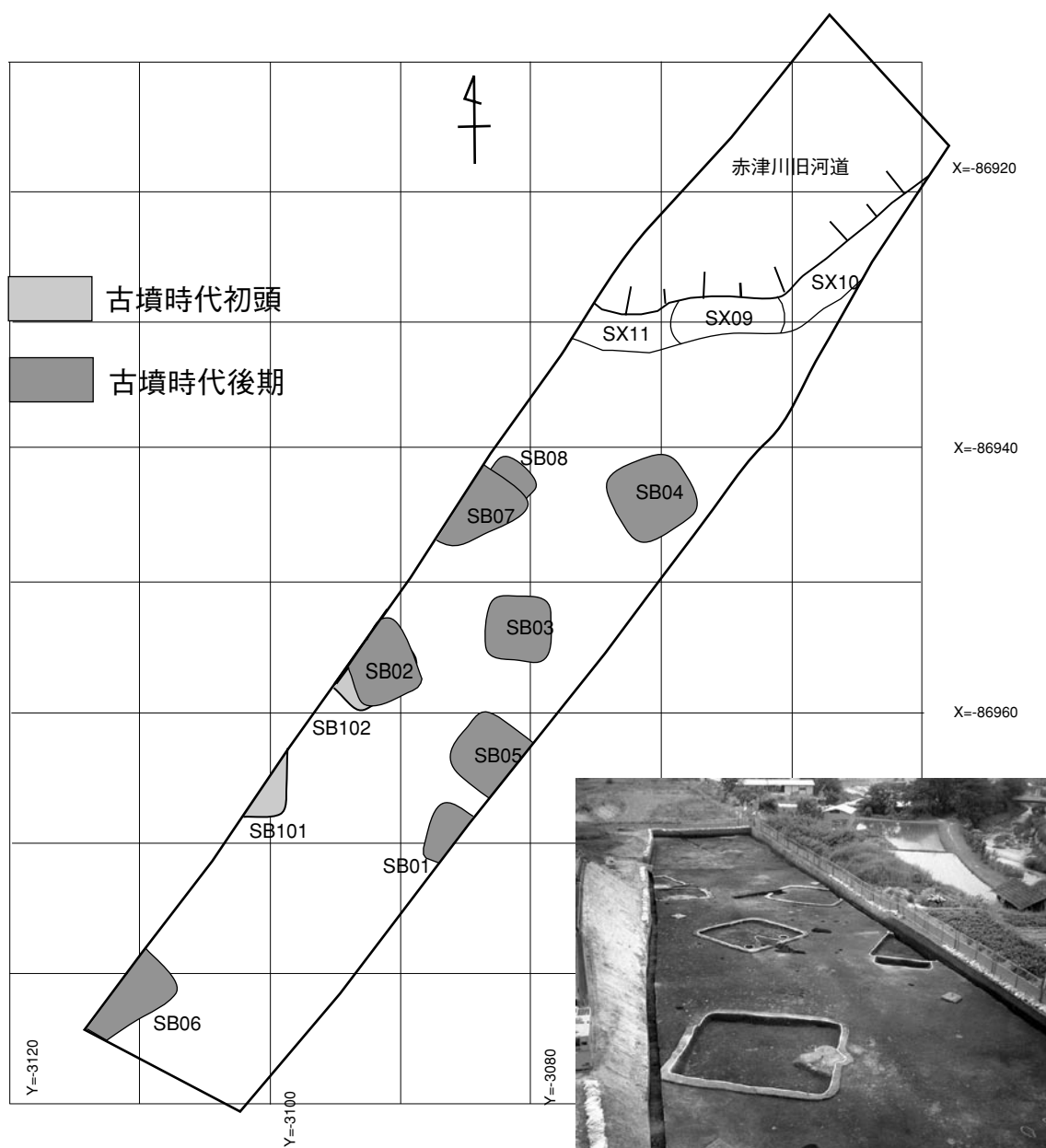
遺構・遺物は縄文時代から中世の時期のものが検出された。縄文時代後期の遺構として

土器埋設遺構が2基検出された。SK94は、上部は不明であるが下部を欠失した無文深鉢形土器を立位で埋置し、内部に土器片を敷いている。SK132は、立位の深鉢形土器の底部のみを検出した。また、倒木跡を1基検出し、埋土中より縄文時代後期の土器を検出した。また、中世の掘立柱建物2棟を検出した。SB01は2間×3間、SB02は1間×3間である。2棟は南北方向の主軸がやや東に振り、同一方位をとる。SB01の柱穴より出土した灰釉系陶器(山皿)から、これらは12世紀後半の時期に属するものである。段丘端に近い部分はやや端部に向かって落ち込み、中世の包含層が認められる。包含層中より13世紀代の灰釉系陶器(山茶碗)が検出された。自然地形として南北方向の自然河道が調査区南半に認められた。いずれも10cm程度の浅い落ち込みで、白色粗粒砂と細礫を埋土とする。

ま と め 昨年度から遺跡範囲の北部の調査を開始し、今年度は02A・02Bの2調査区を設定した。その結果、これまでの調査では確認されなかった時期の遺構・遺物が検出された。弥生時代から古墳時代初頭の時期の竪穴住居及びこれに伴う遺物は遺跡範囲の南部では認められない。集落の及びこれにともなう遺構の範囲は、北部のみに限定される可能性がある。段丘の連続性及び小河川の谷地形による分断など遺跡の地形的なまとまりの面から本遺跡が大きく2つに分かれることが考えられ、今後の検討課題となる。また、02B区で確認されたこの時期の集落は、段丘上位面を東北方向に展開することが推定される。予定されている今後の調査で様相を明らかにすることができるものと考えられる。(酒井俊彦)



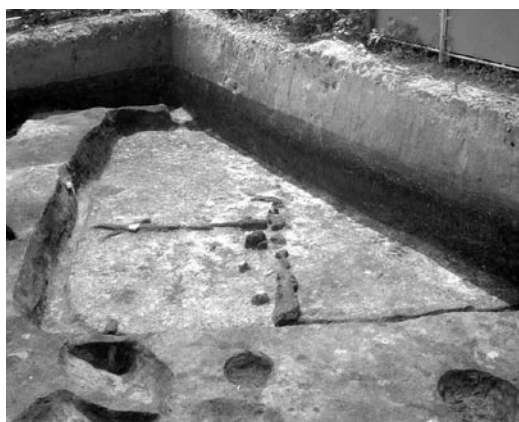
調査区位置図 (1:10000)



02A 区主要遺構図 (1:400)



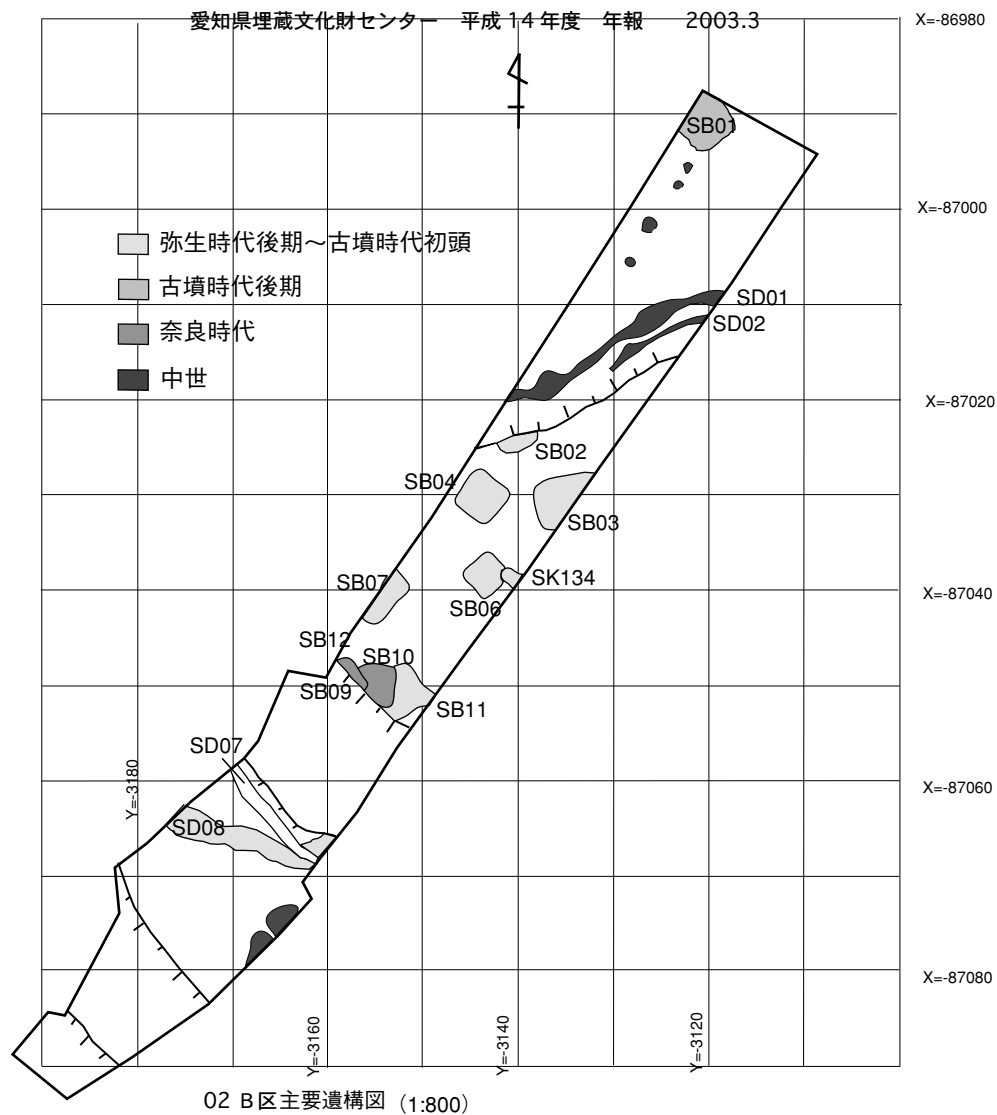
古墳時代後期竪穴住居址群 (北東より)



SB06 (北東より)



SB04 (南より)



SB03 銅鐸型土製品出土状況 (北より)



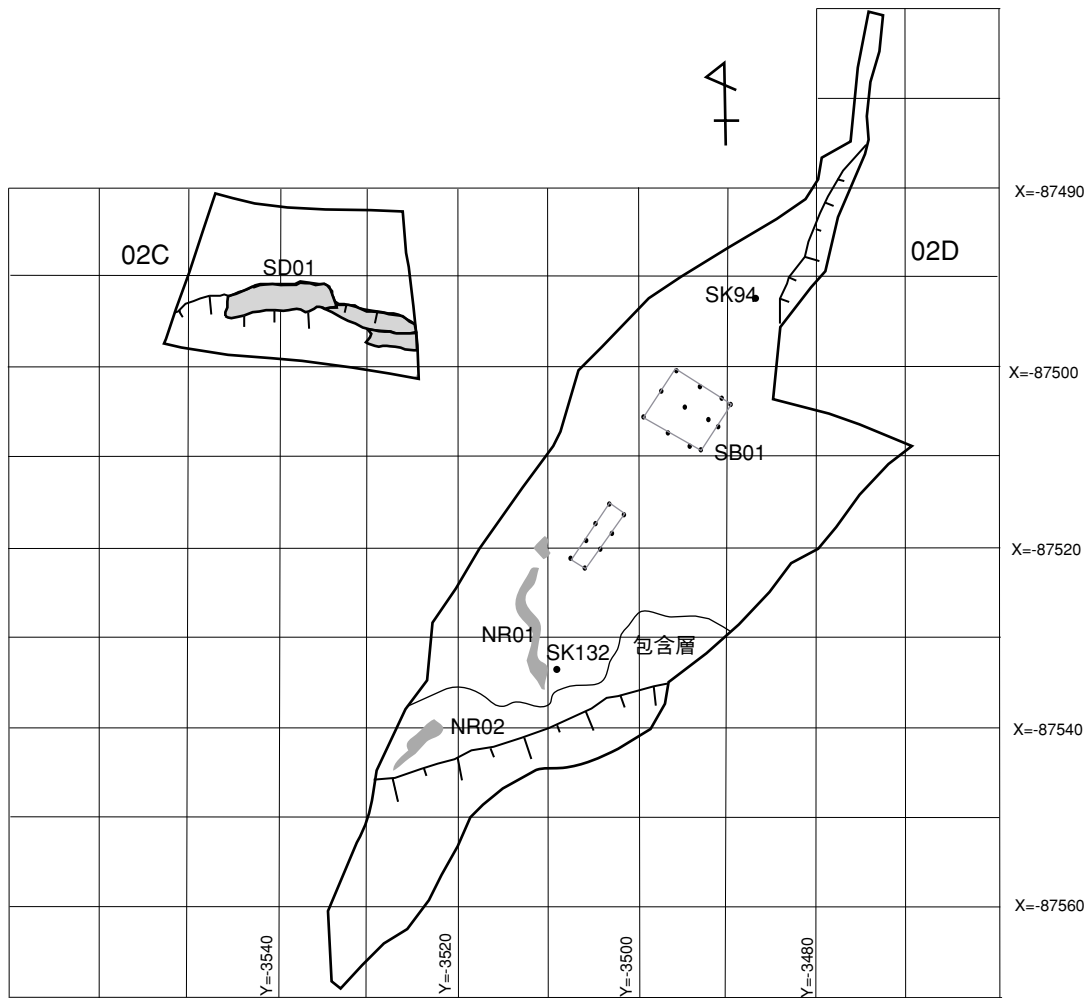
SB04 (南西より)



SB03 遺物出土状況 (北東より)



SD08 (西より)



02 C・D区主要遺構図 (1:800)



02C区全景 (南東より)



02D区全景 (北より)



02D区SB01 (西より)



SK94埋設土器 (西より)